

原 著

## 洗口吐出液中のアンモニア濃度および濁度を指標とした 口腔清潔度検査について

石川 正夫<sup>1)</sup> 山崎 洋治<sup>1)</sup> 森田十誉子<sup>1,2)</sup> 小川 洋子<sup>1)</sup> 森嶋 清二<sup>3)</sup>  
福田 功<sup>4)</sup> 坂本 久<sup>4)</sup> 渋谷 耕司<sup>5)</sup> 高田 康二<sup>1)</sup> 芝 紀代子<sup>6)</sup>

**概要：**本研究の目的は、口腔内を洗口した吐出液中の総細菌数と、アンモニア濃度または濁度との関連性を明らかにし、これらを指標とした簡易な口腔清潔度検査法を開発することである。被験者は、職域成人 287 名(平均年齢 40.2±9.6 歳)で、試料として 3 ml の蒸留水を口腔内に含み、10 秒間軽くリンスした後の吐出液を用いた。吐出液中の総細菌数の測定は、Real-Time PCR 法により、アンモニア濃度はアンモニア試験紙(アミチェック<sup>TM</sup>)により、濁度は光電比色計(ANA-18A<sup>+</sup>)を用いて 660 nm の吸光度より測定した。その結果、吐出液中の総細菌数はアンモニア濃度および濁度と高い相関性を示し、それぞれの相関係数は、0.774, 0.750 であった。これらの結果から吐出液中のアンモニア濃度および濁度の測定は、口腔内の総細菌数の判定指標となり、口腔清潔度検査への応用の可能性が考えられた。また、吐出液中のアンモニア濃度および濁度は、総細菌数と同様、年代が高くなるに従い増加し、加齢による口腔清潔度の低下が示唆された。さらに、4 mm 以上の歯周ポケットを有する被験者の吐出液中アンモニア濃度および濁度は、歯周ポケットを有しない被験者に比べ有意に高かったことから、歯周病リスクの判定のための検査法としての可能性も示唆された。

索引用語：口腔清潔度，アンモニア濃度，濁度，唾液検査